

奨励賞

【全教科】

オンライン有効活用で
小規模校の課題克服と
教職員のレベルアップ

和歌山県有田川町立鳥屋城小学校

さかもととしふみ

坂本 利文

実践の概要

本研究は、近年問題になっている少子化に伴う課題、教員志望者の減少、教員の多忙、経験の浅い教員の割合の増加などの課題を克服するための方法を考えたものである。これらの課題を克服するために、オンラインを活用し、有田川町全体の学校を一つのチームとして捉え取り組みを進め、その成果と課題について考察した。

論文内容の紹介

1 | 研究の目的

本研究は二つの課題に焦点を当て取り組んだ。

一つ目は、児童数の減少により単学級や複式学級の学校が増加したことによる課題である。同学年の担任に学んだり気軽に相談したりする機会が失われている。

二つ目の課題は、授業力や学級経営力、保護者対応力等の向上である。

近年、経験年数の浅い教員の割合が増え、コロナ禍で研修の機会が減少し、働き方改革の流れもあり、他の教員とじっくり話をする時間も取れない。

これら二つの課題を解決するため、オンラインの積極的な活用に着目した。

2 | 取り組みの実際

(1) 町の全教職員共有フォルダの活用

フォルダには、共有したい資料やオンラインミニ講座の資料等が入っている。各種資料を活用して業務の軽減や新しい発想につなげることを目指している。

(2) オンライン学年部会

町内の学校をつなぎ、オンラインで学年部会を開ける環境を整えた。

開催日時は各学年に任せ、バーチャル学年主任を中心に学年毎のニーズにあったテーマで約30分交流した。

同学年の担任同士が気軽に教え合い、顔見知りから相談できる仲間へつなげる役割も果たすようになってきている。

(3) オンラインミニ講座

子供たちに力をつけられる教職員集団を目指し、元校長にミニ講座を開いていただいた。

ニーズの調査アンケートの結果を基に開設講座を決定し、基本的には月1回程度のペースで15分間のミニ講座を開講した。短時間で高濃度の内容を聴くことができ、申し込みも出張伺いも不要で、移動時間もなく、どこからでも気軽に参加し、自己のレベルを上げることができるので、働き方改革にも配慮した開催形態となっている。

ミニ講座の動画は前記フォルダに入っており、都合のよい時間に視聴でき、校内研修等にも活用されている。

(4) 授業に役立つミニ動画（3分程度）

先生方のスキルを共有のものとし、自分の日々の取り組みにプラスしたりアレンジしたりすることで、実践力を高めることができる。教員が互いのちょっとした工夫などを交流し、授業や日常の指導で活用できるミニ動画を作成し活用を勧めている。

3 | 成果と課題

ミニ講座は気軽に参加でき、予想以上の収穫を得たと感じた教員が多かった。月に1回の15～30分間が作業効率を上げ、トラブルの未然防止へつながるのである。しかし、その気軽さゆえにうっかり機会を逃した教員もいた。そのようなことが起こらないように、開講の定例化や周知の方法等について考える必要がある。

オンライン学年部会では、バーチャル学年主任が中心となり、一つ先を見越した話題を展開することで、経験年数の浅い教員も、計画的に指導を行うことができた。また、コロナ禍での宿泊的行事の実施方法について考え、先行実施した学校からの情報を共有することで、よりよい方法や対策を考えることもできた。

4 | 終わりに

本町のように人口減少が進む地域において、近年の教育を取り巻く環境を改善するためには、学校単位ではなく町全体を一つの学校として捉え、考えていくことが必要である。

教育委員会とも連携を図り、各校の中核教員が発信源となり、他の教員を導くことで今後に備えていきたい。

奨励賞

【外国語】

外国語科における話す意欲を高める方略的能力の育成

茨城県牛久市立中根小学校

きののかずは
佐野 一葉

実践の概要

本研究では、外国語科におけるコミュニケーション能力を構成する要素のうち、方略的能力に着目し、Small talk や即興スピーチを通して、継続的に方略的能力を育成し、児童の話す意欲が高まるか検証した。

論文内容の紹介

1 | 研究の内容

本論文では、コミュニケーション能力を構成する要素のうち方略的能力の育成を目指した。方略的能力を、英語で話す際に起こりうる様々な困難に対応する能力と定義し、泉(2017)による以下の方略的能力のうち、1) 2) 4) 5) の要素を指導した。

- 1) 言い換える、何とかして伝える
- 2) 援助を求める
- 3) 会話を調整する
- 4) 会話維持のために反応する
- 5) 時間を稼ぐ

学習指導要領解説外国語活動・外国語科にも「指導すべき言語の働きの例」として、「相づちを打ったりすることなどによって、相手とのコミュ

ニケーションが円滑になることに気付かせることが重要である」とあり「会話を維持するために反応する」（泉、2017）方略的能力の育成を掲げている。

また、茨城県教育委員会令和4年度学校教育指導方針では、小学校において「互いの考えや気持ちなどを伝え合う力を育成する授業改善」を、中学校において「発信力を育成する授業改善」を重点課題に挙げている。それに伴い、小学6年生と中学2年生に英語力アセスメントテストを実施している。中学校英語力向上アセスメントテストは、与えられた場面絵を説明したり、やり取りを聞いて後の質問に答えたりする、即興的なやり取りや話すことの力を試している。また、中学生プレゼンテーションコンテストにおいても、相手の発表を聞いて質問したり答えたりする、やり取りの場面がある。

以上のような状況を鑑み、Small Talk など自分の気持ちを伝える場面において、方略的能力を育成することとした。方略的能力を構成する要素を、相手とのやり取りを円滑にするMagic Word（以下MW）として児童に指導した。やり取りの中で起こりうる様々な困難に対応する手段を知っていれば、話すことへの抵抗感が軽減され、話す意欲の向上につながると考えた。

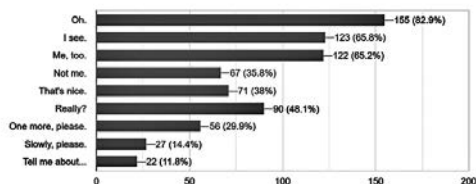
2 | 研究の実際

New Horizon Elementary 6 Unit1 とUnit2 においては、Small Talk を中心に授業を展開した。まとまった量のやり取りをすることで、コミュニケーションにおける困難を生み出しMWの必要性を持たせた。Unit3では、即興プレゼンテーションに挑戦した。児童は旅行代理店の店員で、ALTにある国の食べもの、観光地、土産などを紹介するという設定にした。方略的能力のうちの「言い換える、何とかして伝える」の育成を試みた。まとめとして夏休み前にオンラインでALTと英会話の授業を行った。

3 | 成果と課題

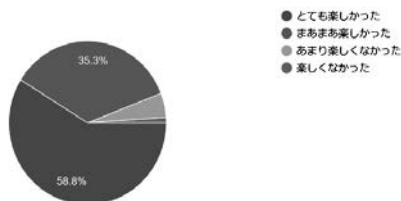
Unit1、2後、行ったインタビューテストでは、ともに8割以上の児童がインタビューに答えるだけでなく、教師側へ質問することができた。やり取りにおいてどう反応すればよいのかという方略的能力の育成により、話す意欲が高まった表れである。Unit3後のプレゼンテーションテストでは、日本かアメリカの写真を見て説明する際、何とか自分の持っている表現を使って伝えようとする姿が見られた。この単元を通して、もっと英語で伝えられるようになりたいという意欲の向上も見られた。3か月間の実践を通して、やり取りの中で黙りこんでしまう児童はいなくなり、児童の発話量も増えた。方略的能力を育成することは、児童の不安を和らげ、話す意欲を高めることが分かった。

あなたはどの表現をよく使いますか？(複数回答可)
187件の回答



資料① 児童アンケート

オンライン英会話を通して、ALTの先生とコミュニケーションをとることが
187件の回答



資料② 児童アンケート

【参考文献】

- ・ 泉恵美子「小学校英語における児童の方略的能力育成を目指した指導」 京都教育大学教育実践研究紀要 2017
https://tosh2.kyokyo-u.ac.jp/webopac/bodyview.do?bodyid=TD00006029&elmid=Body&fname=s006v17p23-33_izumi.pdf&loginflg=on&once=true (最終閲覧2022.9.14)

奨励賞

【特別支援教育】

聾学校における言葉の育みを 目指した掲示活動の取り組み

北海道室蘭聾学校
たかっ なおと
高津 直人

実践の概要

本実践は、掲示物を段階的に示して聴覚障害がある児童の言葉の獲得や言葉の活用を豊かにすることをねらった実践である。

第一段階として、児童の興味・関心がどこにあるのかを複数の掲示物を基に確認した。第二段階として、児童の興味・関心を基にした掲示物を用いて、友達や教師とのやりとりを増やすことをねらった。第三段階として、抽象的な言葉がどのような事柄を示すのかについて掲示物や掲示物を基にした体験活動から理解を深めた。

掲示物を活用した友達や教員との自然なやりとりが、児童の言葉の育ちに繋がった。

論文内容の紹介

1 | 実践にあたって

聴覚障害があることにより、言葉の定着が遅れたり、物事の因果関係を捉えたりすることに困難を抱えることがある。そのため多くの聾学校では、日常生活で役立つ知識や心情理解等を助ける掲示物を多く用いている。

一方、ただ掲示物を用いれば子どもの言葉の力が伸びるかと言えばそうではない。児童の興味・関心を土台に、人とのやりとりを通して言葉を活用していくという営みが子どもの言葉の育ちに繋がっていく。聾学校で大切にしている掲示

活動を下図のように段階的に行っていくことが、児童の言葉の育ちにより効果的に繋がるのではないかと考えた。



2 | 実践内容

(1) 第一段階

複数の掲示物を用いて児童の興味・関心がどこにあるのかを確認した。本校の児童の多くは自身の生活に関連があり、イメージがもちやすく、ゲーム的な要素が入った掲示物に興味・関心を抱きやすいことがわかった。



(2) 第二段階

身近な地域で起こった「鳥インフルエンザ」についての新聞記事と、教師の自作教材を用いて児童同士や児童と教員のやりとりを増やすことをねらった。

コミュニケーション方法が違う児童同士でも相手に配慮して掲示物を指さして説明したり、わからない言葉は教員に教えてもらったりしながらやりとりすることができた。



(3) 第三段階

「地域」や「文化」といった言葉は使用する状況や文脈によって意味が異なる。聴覚障害児がこれらを正しく理解し、活用していくことは難しい。

これらの言葉がどのような事柄を示すのかを理解するきっかけとして、身近な地域にある「ウポポイ(民族共生象徴空間)」を掲示に取り上げた。アイヌ文化を通して地域の様子や様々な文化の具体例を学び、抽象的な言葉を理解しやすくなった。また、栄養教諭と協力しながらアイヌの食文化について学ぶ機会を設け、食文化に関する理解を深めた。



3 | 実践の成果と課題について

(1) 成果

- ・子どもの興味・関心の高い事柄を扱うことで、意欲的に掲示物を見るだけでなく、難しい言葉や、わからないことを質問してくることが増えた。
- ・教員も意識的に掲示物を基にした授業づくりを行ったり、実際の授業場面で活用していく言葉の精選をしたりするなどの変化があった。

- ・児童に学習用語の定着が見られた。

(2) 課題

- ・一つの言葉の理解が、掲示物から学んだものなのか、その他の要因から学んだものなのかを検証できていない点がある。
- ・掲示物を見る時間が休み時間や登下校の時間の10分程度に限られるため、友達や教師とのやりとりが不十分になることがあった。

4 | おわりに

様々な教育改革が行われる中でも、人と人とのやりとりを通じて言葉を育むという営みは時代を問わず必要なことである。その点だけは簡略化できないし、時間をかけなければいけない点だと強調しておわりとしたい。

奨励賞

【学校経営】

閉校が議論された小学校の 挑戦「地域と協働する 攻める教育」

香川県高松市立鶴尾小学校

たなか よしひと
田中 義人

実践の概要

児童数減少によって閉校が議論された小学校の子どもたちや地域住民が、校区に対する誇りを失わないための「地域と協働する 攻める教育」の実践報告である。この実践を通して、子

どもたちの学びを支えるとともに、校区の活性化を図ることを目標としている。

論文内容の紹介

～3つの「攻める教育」実践報告～

1 | 感染症禍の中『便り』で子どもを支える

感染症禍の臨時休業期間に、子どもと直接会えなくても「攻める教育」で心をつなげて、支えていこうとした。担任からの手書きメッセージや学習課題を1週間に1回程度児童宅にポスティングし、郵便葉書で児童の返事を求めるシステムを整えた。

葉書の提供で地域に支えてもらった実践であるが、子どもからの手書きの葉書で地域住民を力づけようと進化させた。

実践の効果は、児童出席率の前年度比較から検証された。

2 | 教育活動を積極的に情報発信する

学校力や校区力の強みを積極的にマスコミ等に情報発信して頻繁に報道されることで、子どもたちのみならず保護者や地域住民の学校や校区に対する誇りを高めようと考えた。また、校区外からは本校が教育推進校として認識されることをイメージした。

感染症禍の中、小規模校のよさを活かした「攻める教育」は2年間で43回報道され、注目を受けた。また地域各種団体と協働する実践についても、学校がリードして作成した報道提供資料で多くの取材が実現した。

3 | 地域が支えるICTによる学力向上

隣接中学校閉校決定時に新聞発表された「小学校についてはICTを活用した特色ある学校づくりを手掛ける」という方向性の中、タブレットを活用した学力向上をめざした。岡山大学寺澤研究室の開発したeラーニング「マイクロステップ・スタディ」で児童が学力向上できれば、GIGAス

クール構想下における「攻める教育」として着目されると考えた。

まずこの学習を、ふるさとへの誇りの醸成と導入経費捻出のために、「Kangenステップ学習」と名付けた。Kangenとは、弘法大師の諡号奏請に活躍した校区の偉人観賢僧正のことである。学問でも大いに努力した僧正に因んで、このeラーニングに努力した児童に対して『観賢賞』を授与することで、ふるさとへの偉人の顕彰事業としたのである。

学校からの依頼に対して、地域では「観賢学習支援委員会」を立ち上げて寄付金を募り、事業を開始することができた。またそのお礼に学校からは、僧正の逸話や功績、史跡等について、子どもたちも理解できる冊子『ふるさと鶴尾に産まれたかんげんさん』を編集した。この冊子は、全校児童だけでなく地域住民にも、また全国の弘法大師に関心をもつ人々に配布され、校区PRに一役買っている。

学力の向上についても、全校生で成果を確認できている。また家庭学習の意欲化や成果を、市内のモデル校として取り組んだ、持ち帰りタブレットから検証している。



【地域夏祭りで祝う「観賢賞」の受賞】

4 | 成果と課題

校区活性化の成果を入学児童数で見ると、依然厳しい状況であると言わざるを得ない。しかし、卒業生が自信をもって進学先中学校を選択し始めたことが確認できている。